

## 袖の湊

——新古今における一つの撰歌意識——

青柳 恵 介

古今著聞集卷第三政道忠臣第三に大略次の如き話がある。後朱雀院が参り集まった上達部の装束を見、翌日蔵人の頭である資房卿をよびよせ「もつてはか外おほまに袖大おほまになりになり、かくては世のついへなるべし、いかゞせんずると右大臣実資のもとへ、いひあはずべし」と言ったという。これを聞いた右大臣実資は、己の如き老大臣が閉門して畏っていることを諸卿に告げれば、さすがにみな自肅するだろうと答えた。その由を伝え聞いた人々は「みなきゝおそれて、装束の寸法すべられけり」という。これと似た政道忠臣の話は、大鏡に延喜の命と時平の話として、もう少し気の利いた形で載せられているが、そこでは「過差」「美麗事」とい

った抽象的な言葉が用いられており、「以外に袖大になりたり」という具体的な表現は用いられていない。「美麗事」の「過差」を言うに「以外に袖大」と表現することは、例えば古今和歌集雑上に収める（伊勢物語八十七段にも）業平の「ぬきみだる人こそあるらし白玉のまなくもちるか袖のせばきに」の「袖のせばき」が「下官などをいひ又卑下の詞にいふめり」（和訓栞）という意味であること、それとちやうど見合っていると考えてよい。袖が大きいか、せまいか、何れにせよそれは貴族階級にとって、美麗であるとか、官位の高低とかに関する一つの象徴的な意味を持っていたと考えることが出来そうである。袖は貴族の顔であ

る。

袖という衣服の限定された空間が、王朝歌人の想像力発揚の空間であり得たことの一端は、ちなみに新古今和歌集一九七九首を聞いてみて一六五首の歌に袖という語が用いられていることにもうかがわれよう。四季、恋、哀傷、羈旅、雑等の如何なる種類の歌にも袖が歌われ得たことは、逆に袖自体決して歌の主題たり得なかつたことを証明しているし、固定的もしくは特定の素材とすら意識されることゝが少なかつたと考えられる。その意味では、袖は歌の舞台である。

人々は袖に香をとどめ、吹く風を袖にうけとめ、霞や霧や雪さえも袖でつつむ。流す涙は袖に落ち、月を直視することよりも袖に結んだ露に宿る月に見入る。紅は袖に映じ、入相の鐘を袖にきく。「袖の別れ」とは、愛する者との別離を意味し、「片敷きの袖」とは一人寝を表し、「もの思ふ袖」とは或る心的状態を暗示する。人々は袖を枕に夢を結ぶ。

袖——この不可思議なる空間。

## I

新古今和歌集第十五恋歌五に、「読人しらず」として、

思ほえず袖に湊のさわやかな唐船の寄りしばかりに

という歌が載せられている。出典は伊勢物語二十六段、「むかし、男、五條わたりなりける女をえ得ずなりにける」と、わびたりける人の返りごと」という甚だ曖昧な状況設定のもとにうたわれた歌である。「わびたりける人」は、染殿ノ后であるという説（伊勢物語直解）、業平と「五條わたりなりける女」の「なただちせし人」であるという説（勢語臆断）、また「わびたりける」は連体止めでここは切れ、「人の返りごと」とと解する説（古典大系）などがある。結局どの説を正しいとするか決め手はないので深入りはないが、新古今の撰者達はこの歌をどういうふうによんでいたか、そしてどういう意図をもってこの歌をここに置いたかという点について考えて置きたい。

新古今では読人しらずになっている。「思ほえず」の歌

が新古今以前に載録されているのは伊勢物語のみであり、在中将集及び雅平本その他の業平集にも見えない。このことだけからすれば、新古今撰者達は業平の作ではないと判断し、「わびたりける」で切り、「人の返りごと」の歌であると考えたと想像するのが一見妥当のようであるけれど、ことはさほどに単純でない。既に契沖が指摘しているように「新古今新勅撰等に此物語に業平の哥なるを読人不知と載られたるも例」(勢語臆断)がある。

新古今集で伊勢物語から引いて来た歌は全部で二十三首あり、そのうち十首が読人しらず歌である。十首のうち九首は恋歌であり、一首は神祇歌である。件の神祇歌は、伊勢物語百十七段で帝が住吉に行幸した際、住吉の神が「現形し給ひて」よんだ歌であるから、これは読人しらずとする以外にない。問題は九首の恋歌である。

- ① 君来んといひし夜ごとに過ぎぬれば頼まぬものの恋  
ひつつぞ経る (新古今恋歌三・三〇七、勢語二十三段)
- ② おもほえず袖に湊のさわやかな唐船の寄りしばかり  
に (新古今恋歌五・三三〇、勢語二十六段)

③ 忘るらんと思ふ心のうたがひにありしよりけにもの

ぞ悲しき (新古今恋歌五・三三六、勢語二十二段)

④ 憂きながら人をばえしも忘れねばかつ恨みつつなほ  
ぞ恋しき (新古今恋歌五・三三〇、勢語二十二段)

⑤ 今までに忘れぬ人は世にもあらじおのがさまさま年  
の経ぬれば (新古今恋歌五・三三六、勢語八十六段)

⑥ 山城の井手の玉水手に汲みて頼みしかひもなき世な  
りけり (新古今恋歌五・三三六、勢語百二十二段)

⑦ 君があたり見つつををらん生駒山雲な隠しそ雨は降  
るとも (新古今恋歌五・三三六、勢語二十三段)

⑧ 中空に立ちある雲の跡もなく身のはかなくもなりぬ  
べきかな (新古今恋歌五・三三六、勢語二十一一段)

⑨ 大淀の松はつらくもあらなくにうらみてのみもかへ  
る波かな (新古今恋歌五・三三三、勢語七十二段)

①・④・⑦・⑧・⑨の五首は伊勢物語中の女性がよんだ歌で、その女性の名が分らぬ以上読人しらずとする他ないから一往除外して考えよう。残る四首は伊勢物語において「男」がよんでいる歌である。片桐洋一氏の説(伊勢物語の研究)によれば、和歌知頭集をはじめ鎌倉時代の勢語注積書の類は、伊勢物語を業平の実伝を物語化したものと考

えていたという。勿論新古今撰者達が伊勢物語に對して和歌知顯集等に見られる認識と全く同じ認識を持っていたとは限らないだろうが、細部についてはともかく、全体の認識において遠く離れていたとはむしろ考え難い。つまり、新古今撰者達が何らかの掬るべき認識をもって伊勢物語中の「男」の歌を業平とせずに敢えて読人しらずとしたとは考え難いのである。とすれば、②・③・⑤・⑥の「男」の歌四首（このうち当面の②は先に示したように違うよみ取りが可能であるから厳密に言うると三首）は、当然読人しらずではなく、はつきり業平朝臣と明記すべきなのではないか。また⑤は、雅平本業平集にも在中将集にも収録されており、それを含め新古今撰者は読人しらずにしているのである。逆に、新古今では作者を業平と明記しているが、在中将集や雅平本その他の業平集の何れにも載せない歌が五首あり、これを作者業平とした根拠は伊勢物語に収められていることに求めたときか考えられない。この不統一を一体どのようにか考へるべきか。論理的整合性をこの事実と与えらるるとすれば、仮説は一つしかないであろう。すなわち、新古今撰者達は②・③・⑤・⑥の四首を業平の歌と考へていたにもかかわらず、ある作爲をもつて敢えて意図的にそれらを読

人しらずとしたのである。では、その意図は奈辺にあったか。

②・③・⑤・⑥の四首が、新古今和歌集恋歌五において、一つのグループの中の歌であることに注目しよう。②の「おもほえず」の歌にはじまり、大和物語百五十八段を出典とする「われもしか」の歌に終る十六首の読人しらず歌は、実は新古今集中最も長大な読人しらず歌群を形成している。その歌群は件の四首のみならず、④・⑦・⑧の伊勢物語歌をも含む。

一三 おもほえず袖に湊のさわやかな唐船の寄りしばかり  
に  
(勢語二十六段)

一三 妹が袖別れし日より白妙の衣片敷き恋ひつぞ寝る  
(万葉集卷十二)

一三 逢ふことのなみの下草みがくれてしづ心なく音こそ  
泣かるれ  
(大和物語百十三段)

一三 浦に焚く藻塩の煙なびかめや四方の方より風は吹く  
とも  
(准成弁集)

一三 忘るらんと思ふ心のうたがひにありしよりけにも  
ぞ悲しき  
(勢語二十一一段)

二三憂きながら人をばえしも忘れねばかつ恨みつつなほぞ恋しき  
(勢語二十二段)

二三命をばあだなるものと聞きしかどつらきがためは長くもあるかな  
(清正集)

二三盞いづ方にゆき隠れなん世の中に身のあればこそ人もつらけれ  
(古今和歌六帖・拾遺集恋五)

二三盞今までに忘れぬ人は世にもあらじおのがさまさま年の経ぬれば  
(勢語八十六段・古今和歌六帖)

二三玉水を手にもすびてもこころみんぬるくは石の中も頼まじ  
(伊勢集)

二三山城の井手の玉水手に汲みて頼みしかひもなき世なりけり  
(勢語百二十二段・古今和歌六帖)

二三君があたり見つつををらん生駒山雲な隠しそ雨は降るとも  
(勢語二十三段)

二三空中に立ちある雲の跡もなく身のはかなくもなりぬべきかな  
(勢語二十一一段)

二三雲のゐる遠山鳥のよそにてもありとし聞けばわびつつぞ寝る  
(古今和歌六帖)

二三昼は来て夜は別るる山鳥の影見ぬ時ぞ音は泣かれける  
(出典未詳)

二三われもしか泣きてぞ人に恋ひられし今こそよそに声ののみ聞け  
(大和物語百五十八段・今昔物語)

伊勢物語、大和物語に伝える歌が九首あり、一見して歌の背景には恋物語の世界が感じとれよう。結論から先に言うと、新古今の撰者達は、それぞれ独立した秀歌を十六首ここに並べたのではなく、十六首が連続した恋物語を彷彿させるべく工夫し配列したのだと思われる。享受者は、それぞれの歌の後にひろげられている先行の恋物語を一方で充分に意識しつつも、一方では先行の恋物語から切り取られてきた断片が新たな枠の内に組み込まれ再構成されている体の配列に、歌のよみかえを余儀なくさせられるという恰好である。伊勢物語を出典とする恋歌がその骨組みを形成していることは言うまでもないが、他の読人しらず歌についてもことは同様だ。

十六首中一三七〇、一三七一の二首は山鳥の歌であり、一往は「山鳥に寄せた恋の歌として小さな纏まりを示している。」(新古今和歌集全評釈)と解せられるところである。一三七〇の出典は古今六帖、一三七一は出典未詳だが、奥義抄に「古歌に云く」として引かれているところから、比

較的人口によく膾炙していた歌と察しられる。この寄山鳥恋の古歌二首が単に山鳥の歌である故をもって他から独立しているとは思えない。その背後には、やはり或る恋の物語が用意されていると思う。

源氏物語総角卷に次の一節がある。薰と大君の対面の場である。

大君「猶、かく、物思ひ加ふるほど過ごし、心もちもしづまりて、聞えむ」とのたまふ。人にくゝ、け遠くはもて離れぬ物から、障子のかためも、いと強う、しひて破らんをば、「つらく、いみじからん」と、おぼしたれば、「おぼさるゝやうこそはあらめ。軽しく、ことざまに靡き給ふこと、はた、世にあらじ」と、心のどかなる人は、さはいへど、よく思ひしづめ給ふ。

薰「たゞ、いと、おぼつかなく、物隔てたるなむ、胸あかぬ心ちするを、ありしやうにて、聞えん」と、せめ給へど、

大君「常よりも、わが面影に恥づる頭なれば、うとましと、見給ひてむも、さすがに苦しきは、いかなるにか」と、ほのかにうち笑ひ給へるけはひなど、あや

しう、なつかしくおぼゆ。

薰「かゝる御心に、たゆめられたまつりて、遂に、いかになるべき身にか」と、歎(き)がちにて、例の、遠山鳥にて明けぬ。

(古典大系本四三二、四三三頁)

愛情の永遠化を求める大君は、薰の愛情を理解しながらもそれを拒絶する。「あはれ」という感情はいつしか「つらし」という感情に変質すると彼女は思うからである。薰は障子を隔てて一夜を明かす。その薰の心を「例の、遠山鳥にて明けぬ」と作者は表現しているのである。「例の」とは、次の一事を想定した言葉だ。同じく総角卷の前半部(古典大系本四一五、四一六、四一七頁)に、薰が大君に「障子をも引き破りつべき氣色」で袖をつかみ接近し、彼が拒絶される場面がある。そこで拒絶された薰は「さらば、隔てながらもきこえさせん。ひたぶるに、なうち捨てさせ給ひそ」と言い、障子を隔てて夜を明かしたのである。そこに「いとよしき水の音に、目もさめて、夜半の嵐に、山鳥の心ちして、明かしかね給ふ」とある。この「山鳥の心ち」を踏まえ、またもや障子を隔てて一夜を明かすことになっ

た薫を「例の、遠山鳥にて」というふう言っているのである。

「山鳥の心ち」なる言葉は夕霧巻にも現れていて、落葉宮に迫る夕霧が拒絶され一夜をものを隔てて明かす場面で使用いられている。源氏物語において「山鳥の心ち」とは、女性に拒絶された男性が止むを得ず障子を隔ててその場で夜を明かす、というかなり限定された状況のもとに用いられる言葉である。言うまでもなくこれは引歌と考えるのが穩当で、源氏物語諸注釈は新古今に収める一三七〇、一三七一をあげている。定家の奥入でも、総角巻の「例の、遠山鳥にて明けぬ」を注して一三七〇の歌を引いている。

源氏物語を必読の書としていた新古今歌人がこのことを念頭に置かずに一三七〇、一三七一の二首をここに収録したとは考えられまい。むしろ実情は、源氏物語で引歌されている故をもって恋歌五の詠人しらず歌群に二首を撰入したのでらう。すなわち、一三七〇、一三七一の二首は出典としての物語は背負ってはいないけれども、その伝承過程もしくは享受過程のうちに物語性を獲得して来た歌だと言うことが出来る。

大和物語百五十八段を出典とする一三七二につづく一三

七三は「夏野行くを鹿の角のつかのまも忘れず思ふいもが心を」という人麿の歌であり、一三七二、一三七三の二首は寄鹿恋というふうにもこれまた一つの纏まりを示している。歌の題材という点では一三七〇、一三七一と一三七二は接続していない。一三七二は一三七三の人麿の歌と接続する。だが、歌の物語性という観点から見ると一三七二はむしろ一三七〇、一三七一と連続する。一三七二は大和物語では、女が「壁を隔てて」住んでいる昔の男に向ってよんだ歌である。源氏物語を意識すれば、山鳥の歌からは即座に夕霧と落葉宮との恋、薫と大君の恋、とりわけ後者の障子を隔てた恋が連想され、その連想が次に一三七二の壁を隔てた大和物語の恋の連想を生むという按配だ。それは拒絶された男から捨てられた女への移行であり、また、宇治十帖の恋の救いのなさが、新たな配列の中で、大和物語の「とよみたりければ、かぎりなくめでて、この今の女をば送りて、もとの如なむ住みわたりける」という幸福な結末によって、暗から明へと導かれるとも言えよう。それぞれの歌は新古今に先行する物語を連想させつつ、その繋がり合いの間には新古今独特のコンテクストに沿った物語の移行があり、独立した一首の鑑賞では味わえぬ妙味がよみ

とれるのである。新古今が、先行する恋物語の断片を掠めながらも独自のコンテクトを持ってのことについて、十六首のうちからも一つ例を引いておこう。

十六首中に伊勢物語二十一段に収める歌が二首ある。一三六一、一三六九である。説明するまでもないだろうが、二十一段は「いとかしこく思ひかは」していたのに、ふとしたことから女が家を出て行ってしまった話である。「いとひさしくありて」女は男に再び歌を贈って来る。そこで「またまたありしよりけにいひかはして、男」がよんだ歌が一三六一の歌であり、それへの返歌が一三六九の歌である。伊勢物語ではこの二首は唱和の体をとっており、もし新古今の撰者達が勢語のコンテクトを尊重するならば、二首は並んで置いて然るべきところだ。にもかかわらず、二首を離して置いてある。それは次のような次第によると推測される。伊勢物語は一三六九の歌を載せ、「とはいひけれど、おのが世々になりければ、うとくなりにけり」と結んでいる。この結末が新古今撰者達に、一三六九の歌を一三六一の次に置くことを躊躇させたのではないか。また「身のはかなくもなりぬべきかな」という一三六九の歌自体、恋の終りを暗示する。十六首の読人しらず歌全体の

構成上、恋の終末はまだ早いのである。

一三六一の次の一三六二は、伊勢物語二十二段「むかし、はかなくて絶えにけるなか、なほや忘れざりけむ、女のもとより」として載せる歌である。過去に一度別れた仲だが、別れた原因がほんの些細なふとしたことであつたのと同じように、またふとしたことから昔の人が恋しくなる。一方ではまだ恨んではいても。昔に冷めた恋が今一度くすぶり返るならば、この一三六二の歌こそ一三六一の歌の次に置くことが相応しい、と新古今撰者達はよんだに違いない。そしてここから、再び燃えはじめた恋は「つらきがためは長くもあるかな」(一三六三)、「世の中に身のあれぼこそ人もつらけれ」(一三六四)というように極めて苦しい嘆きとなつてつづく。

恋の終りを予感させる一三六九の前の歌は、伊勢物語二十三段で、高安の郡の女が、通つて来なくなった大和の男をしのんでうたった歌である。二十三段は「男、すまじなりにけり」と終る。高安の郡の女の「雲な隠しそ」(一三六八)を受け、一三六九は「中空に立ちゐる雲の跡もなく」とうたう。そして歌の余韻として、二十三段の「男、すまじなりにけり」を、二十一段の「おのが世々になりにつれ



ば、うとくなりにけり」で受けているようによめる。そして一三六九につづく一三七〇は、先に述べたように女に拒絶された「山鳥の心ち」を連想させる歌である。

以上述べて来たことから知られるように、新古今恋歌五の十六首の読人しらず歌群は、独自の恋のコンテキストを持ってゐる。大雑把にそれを概括すれば、「おもほえず」(二三五七) 男と女は何かの事情があつて、別れなければならなくなる(二三五八)。だが二人には、依然として別れていても互いを恋う気持が強い(二三五九、一三六〇)。恋の贈答が再び始まる(一三六一、一三六二)が、それは余りにも苦しい(二三六三、一三六四)。やがて二人の間の信頼関係が脆いものと知られ(一三六五、一三六六、一三六七)、破綻が訪れる(一三六八、一三六九)。そして、ものを隔てた恋の贈答が行なわれる(一三七〇、一三七一、一三七二)。勿論、この概括は肉をおとした極めて散文的な骨組みに過ぎないが、それでもこれがほとんど一つの歌物語の観を呈していると思ふべきであらう。敢えて言うなら、新古今撰者達はここに古歌を用いながら新しい歌物語を創作してゐるのである。

物語は本質的に固有名詞を必要とせぬ世界である。特に恋の物語は、極まるところ男と女の世界であり、源氏物語

でも恋の物語の絶頂では固有名詞は捨てざられ、男君と女君と呼ばれることにおいて恋物語は成立する。十六首が一つの歌群となつて歌物語を形成する際に、如何に恋多き業平とて歌の作者が顔を出すことは邪魔になるだけだ。新古今撰者達が十六首の中に業平の作になる歌があることを認めながらも、すべてを読人しらずとして撰入した意図はそこにあつたと、私は考へる。

さて、「おもほえず袖に湊のさわぐかな唐船の寄りしばかりに」という歌は、十六首の読人しらず歌の一番最初に置かれ、恋の物語の発端を担わされた歌であつた。袖の湊に唐船が寄るといふ、甚だ大胆な発想は如何にも人の想像力を刺激する。

## II

なく千鳥袖のみなととひこかしもろこし舟もよるの  
ねさめに

捨遺愚草上の「夏日侍太上皇仙洞同詠百首應製和歌」すなわち千五百番歌合百首の冬十五首中に見える歌である。

千五百番歌合では公経卿の左(冬三、九百八十番)「さひしさをいかにとはましゆふつく日さすやをかへの松の雪をれ」と合わせられて、勝となっている。判者蓮経は「右歌伊勢物語におほええす袖にみなとはさはくらしもろこし舟もよせつはかりにといふ歌をとるなりゆへなきにあらねは以右為勝」と述べる。また、正徹物語ではこの歌を引き「作者の歌は、詞の外に、面かげそひて何となくうち詠てあはれに覺ゆる也」と評している。

第五句の「よる」は、「もろこし舟も寄る」と「夜のねざめに」の掛詞。一首の意を散文的に説明すれば大凡次の如きことになる。寒氣凜凜と迫る夜半の湊に千鳥が飛び交い、黒々とした唐船が波をたてて入港する光景が一方にあり、一方には払曉にはまだ間のある時刻、淋しさに流した涙は袖に溢れ、千鳥の鳴声に目を覚ました作者がいる。

その二つは、千鳥が飛び交い唐船の入港するのが「袖のみなと」であることにおいて一つのものとなる。「袖のみなと」という虚構の場は、「よるのねざめ」という夢幻の時を得て、暈された意識の中でリアリティを獲得する。また、なく千鳥、寒氣迫る夜半の湊、唐船というイメージが何れも荒涼とした世界、寒々とした淋しい世界に属するも

のであるにもかかわらず、一首全体に艶な雰囲気濃厚に漂っているのも、畢竟すべてが「袖のみなと」というすぐれて虚構的な場に展開されている故のことだろう。

「袖のみなと」なる語が荒涼を艶に転ずる力を持つ所以は、蓮経が既に指摘した通り本歌が伊勢物語の歌で、それが恋の歌であることに拠っている。正徹の言う「詞の外」の「面かげ」も恐らくこの歌が表層のレベルでは冬歌としての相しか持たぬが、より深い朦朧とした層に恋歌としての相を秘しているという意味の言であらう。そのとき「袖のみなとをとひこかし」とは、恋する者への痛切な呼びかけと読みとれ、敢えて言うなら寒々と孤閨をかこつ女性が恋する男性に「問ひこかし」と嘆いているとさえ読みとれてくるのである。何れにせよ、本歌の恋の嘆きは、定家の歌においても響いている。

建保四年(一一二六)定家時に五十五歳、自らの過去の詠草の中から二百首を選び、それを結番するという作業に着手している。定家卿百番自歌合である。詳しい検討は省くが、その二百首何れも彼の自信作で、自らの秀歌撰といった趣を呈していること、同時にその結番にあたっては単に主題を同じくする歌を合わせるだけでなく、左右の二

首が互いに映発し合い、それぞれの歌の情調をたかめるような配慮工夫が成されていること、その点で注目すべき自歌合である。その四十五番に次の二首がある。

左

大輔百首

たひねするゆめちはたえぬすまのせきかよふ千鳥の暁の声

右

千五百番

なく千鳥袖のみなとをとひこかしもろこし舟もよるのね覚に

右は今問題にしている歌、左は文治三年（一一八七）二十六歳の時の殷富門院大輔百首冬十首中の作である。須磨の関の旅寝と言え、即座に連想されるのは、言うまでもなく源氏物語須磨巻である。

例の、まどろまれぬあか月の空に、千鳥いと哀れになく。

とも千鳥もろご多になくあかつきはひとりねざめの床もたのもし

まだ起きたる人もなければ、返々ひとりごちて臥し給へり。  
（古典大系本四六頁）

定家の左「たひねする」が、右に引いた須磨巻の一節を踏まえての作であることは間違いない所と思われる。

「夢路」「絶えぬ」「通ふ」は「関」の縁語、須磨の関に都への夢路は跡絶え、ただ暁の千鳥だけが通ってくるというのである。これは源語の「まどろまれぬあか月の空に、千鳥いと哀になく」から想を得たのだから。そして、それを踏まえることによって「旅寝する夢路」の内容が、紫上をはじめとして都に残してきた女性達に思いを馳せる光源氏の境遇と重なって来る。冬歌としての層の下に、恋の地塗りを施し、それが全体的な艶を湛える所以となる、その手法は、右の「なく千鳥」の歌の場合と同様である。定家は、左に源氏物語を踏まえた作を置き、右に伊勢物語を踏まえた作を配し、その合わせの妙を楽しんだのだと想像される。批評眼の冴えた五十五歳の定家の心憎いばかりの結番と言うべきであらう。

ちなみに左歌の出典である殷富門院大輔百首の雑恋十首中には、「さもこそはみなとはそてのうへならめきみに心

のまつさわくらむ」があり、私の調べた範囲で言うに定家だけに限らず、これが勢語の「おもほえず」の歌の本歌取の作歌年代が明確なもののうち最も古い例である。「なく千鳥」の歌に「たひねする」の歌を番つがえた時、定家の念頭にはそのことがあったかもしれない。

さて、話題を定家から他の新古今歌人達に転じてみよう。勢語二十六段「おもほえず」の歌の本歌取は建仁元年の千五百番歌合において流行の頂点を示している。定家の「なく千鳥」もそうだが、その他に、

千二百五十三番 右

うとかりしもろこし船もよるばかり袖のみなどをあら

ふ白浪

千二百九十七番 右

こひわふる袖の湊の浪枕いくようきねのかずつもる

らん

忠良卿

がある。三宮の歌も忠良の歌も恋の歌で、共に判者顯昭は持としている。両首とも歌意は平明だが、「唐船」「袖の湊」という特異な題材を己の歌の中で熟こなしきっているとは

言い難い。しかし私がここで言いたいののは、件の歌の本歌取の流行の中に定家の「なく千鳥」というような佳作が生まれ得たということだ。言葉を換えて言えば、同一の古歌を取りながら、如何に個性的な歌を作り出すか、それを競う詩的共同体の如きものの存在がなかったとしたら定家の如き歌人は生まれ得なかっただろう。もう少し例を引くと、式子内親王に製作年代は不明だが次の二首がある。

むねのせき袖のみなとゝ成にけり思ふこゝろはひとつ  
なれとも  
(前小斎院御百首)

かけなれてやとる月かな人しれす夜なく、さわく袖の  
みなとに  
(雖入勅撰不見家集歌)

式子内親王は建仁元年(一一二〇)正月に世を去っているから、千五百番歌合の三首以前の作であることだけははっきりしている。久保田淳氏の考察(新古今歌人の研究)によれば、定家をはじめその他の歌人の千五百番歌合百首には、式子内親王の死への哀惜から彼女の作品に影響を受けた歌が著しいという。先にあげた「袖の湊」三首も、もしかすると彼女の作に触発されての本歌取であったかもしれない

ない。その可能性は大いにあり得るだろう。と言うのは、契沖が勢語臆断で「此哥に袖にみなとのさわくかなといへるを本哥にとれる哥どもは、おして袖のみなとといへる歌」と述べているように、千五百番歌合の三首以降「袖に湊の」という本歌の叙述を「袖の湊」といわば体言化して取っているのである。私の調査した範圍で言うと、「袖の湊」と体言化した最初の歌人が式子内親王である。以後「袖の湊」は本歌の詞というよりむしろ歌語に近い形で、例えば「我ためや浪もたかしの浜ならん袖のみなとの浪はやすまて」(十六夜日記)というふうに使われる。勿論、定家や三宮や忠良はそれを既に本歌から自立した歌語というふうには思わなかっただろうが、「袖の湊」という語の新鮮さに鈍であったとは思われない。

ひるがえって式子内親王が「袖の湊」という本歌の取り方を発明した基盤には、例えば俊成久安百首の恋歌

なみた河そてのみわたにわかかへりやるかたもなきも  
のをこそ思へ

というような歌があったに違いなく、さらにその向うの

広い地平には、後年順徳院が八雲御抄に書き記した「昔より心なき物に心をあらせ、物いはぬものに物をいはせ、有るべからざる事をたとへ、人の心ををこがましくなし、そらほけをこのみ、そへ事をことゝす。昔の在納言は、春のきるかすみの衣、なみだのたきなどよめり。中比俊頼など、ものいひかはせ秋の夜の月、心もゆきてかさなるをなどよめり。その外、枕のしたに海はあれどいひ、袖にみなとのさわぐかな、大空におほふばかりの袖、時鳥なく一聲に明るしのめ、空にや草のまくらゆふらむ、などいへるたぐひ多かるべし」といった詩的共同体の持つ歌の認識が開けてこよう。私は別に個人の創造を詩的共同体に帰着させ、ことを曖昧に化そうというつもりは毛頭ない。新古今時代において個人の創造が必ずや同時代人の詩的共同体に立脚して成り立っていることを明確にしておきたいだけである。

少々横道に逸れたが、以上述べたことをもってもう一度勢語二十六段の「おもほえず」の歌を新古今集恋歌五に載録した撰者達の意識を考えてみよう。件の歌は右に見て来た通り、新古今当代に入って俄然注目を浴びるに到った古歌である。伊勢物語所収の和歌のうち歴代勅撰集の撰入に

洩れたから捨うという消極的な態度で撰んだのではなく、本歌取の盛行がその本歌を撰ばしめる一つの大きな力となつたと想像できる。本歌取という和歌創作上の一手法は、その前提として古歌を如何に享受したか端なくも顯にすると同時に、また、本歌取が何度も繰返される過程で、当の本歌それ自体が本来持ち得なかつた或る種の情調が本歌取という経験を通して背後に付随して感得されるという、短詩型ならではの現象もおこるだろう。

新古今集の読者は、「おもほえず」の歌を見出し出したとき、即座にそれを本歌取した沢山の歌を思い浮かべたであらう。そうして、その歌々の和声を背後に聞きながら「おもほえず」の歌を鑑賞したに違いない。読者の意識は撰者の意図である。